

筑波研究学園都市に建設される 工業技術院筑波研究センターの起工式を迎えて

起 工 式

昭和50年6月9日 既に梅雨に入って前日まではうっとうしい空の下におぼろな姿を見せていた筑波の峯がこの日は 心地よい青空の中に 美しい姿をくっきりと見せていた。そして その南に広がる緑豊かな筑波研究学園都市の南東端に近い 工業技術院B地区の建設地の一角に建つ 清楚で 赤と白の美しい祭の場に向う参列者の波が杜絶えた午前11時 筑波研究学園都市(TSUKUBA SCIENCE CITY) に設立される工業技術院筑波研究センター (TSUKUBA-AGENCY OF INDUSTRIAL SCIENCE AND TECHNOLOGY-RESEARCH CENTER, TIC) の起工式が おごそかに始められた。記念すべきこの良き日 工業技術院筑波研究センターの本格的工事が いよいよ 着工の運びとなったわけであるが この式典が挙行されるに当っては 大山信計画課長をはじめ計画課の方々やその他の関係者の御苦労は測り知れぬものがあつたにちがいない。そうした方々の人の目に触れぬ場での努力が 梅雨時に快晴の日を招きそして 清楚な美しさの中に感動的でさえあつた式典として実を結んだのであろう。そして 筑波研究学園都市関係では最大の起工式となつたことは 筑波研究センターにかける関係者の熱意と 図面が物に変わるこの日を迎えた人々の 期待と決意の率直な表われであるように思えた。

土浦駅前から 貨切バスに分乗して 起工式々場へ向

筑波計画本部

つた。 明るい緑の中をゆるやかにうねる道路を走る自動車は少ない。 東大通りは工事中である。

筑波研究センター現地事務所付近で 東大通りから西へ入ると 地質調査所の建設地となる畠と松林が見える。バスは この道から北西へ曲り B地区建設用地(高層気象台跡)の一角に設けられた式場に着いた(第1 2図)。

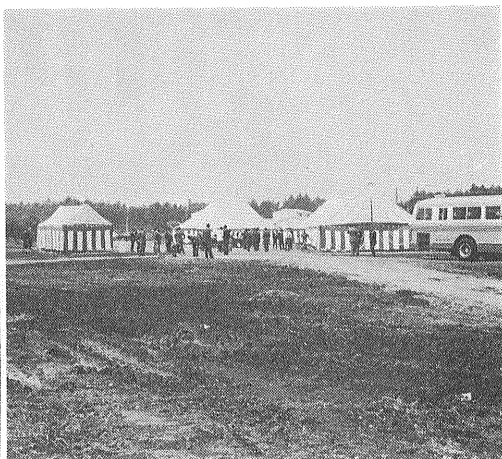
開式の辞がはじまる午前11時 式場は 水をうったように静まりかえつた(第3図)。 簡素な神事の場の純白の御幣は そよとも動こうとはしない(第4図)。 式は修祓 降神之儀 鍬入之儀(第5 6図)と進み 玉串奉奠の時を迎えた(第7図)。 松本敬信工業技術院長とこの地に移転する9試験所の所長の玉串奉奠は 静寂の中で よどみなく進められていった(第8 9図)。 神前にぬかづくその時 院長の胸に 所長の胸に そしてそれを見守る人の胸に去来したものは 一体 何であつたらう。

昭和50年6月9日 筑波との出合から既に12年を経たこの日は 快晴であつた。 緊張に包まれていた式場には 起工式が完了した12時を期して 明るい笑が広がつていった。

起工式が滞りなく終つた後 直会が行われた。 テーブルに並ぶものはささやかであつたが 場内には隅々ま



第1図 筑波研究センター起工式々場の入口と立看板



第2図 起工式々場全景 東京工業試験所の建設地ですすでに工事が進められている

で 笑顔の語らいが満ち満ちていた。背広の群に作業服が混っている。現場からかけつけた作業服の若者はたくましくそして 実に頼母しく見える。作業服姿あり 地元の人々の素朴な姿あり そして 朝早く家を出てこの場に臨んだ人あり 会場にみられるこうした人々の古い知己のような語らいは 筑波研究センターのあるべき姿の一端を象徴しているようにみえた。長老格の桜村々長の筑波研究センターに寄せる大きな期待を力強く語る姿 その姿 その言葉に 理想的な筑波研究センターの建設と完成後の素晴らしい研究成果にける最大の努力を 関係者一同 改めて心中秘かに誓ったにちがいない。

起工式の完了とともに 工業技術院筑波研究センターは その完成を旨ざして 現実に 一勢にゴウの態勢に入った。これから後は 猛暑の中でも 厳寒の最中で

も 絶え間なく そして日一日と 建設の槌音は高まってゆく。

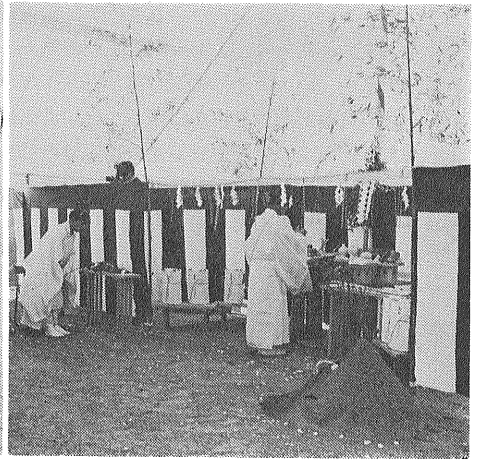
地質調査所の施設のあらまし

東京から北東へおよそ60キロメートル 標高20~26メートルのほぼ平坦な地に 面積およそ2,700ヘクタールにおよぶ筑波研究学園都市の建設が進められている。

その南東端部およそ290ヘクタールの地が 工業技術院筑波研究センターの建設地である。そして 地質調査所の施設は 面積8.1ヘクタールを占めて ほぼその中央部に当る茨城県新治郡桜村大字大角豆字梅里2087に建設される(第10図)。学園都市の北西方から南東方へ走る学園東大通りから西へ入ると 工業技術院筑波研究センターのB地区と呼ばれる梯形の区域があり 区域の内側を一周りする外環状道路とその内側を走る内環状道路との間には7試験所が 内環状道路の内側には工業技



第3図 式場風景



第4図 簡潔な祭壇と神主の祝詞奏上



第5図 鍬入れをする浅香久春筑波研究学園都市管轄建設本部長



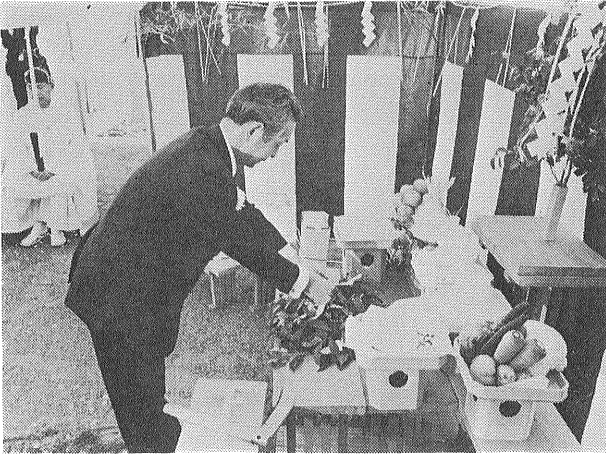
第6図 鍬入れをする渡部恒三通商産業省政務次官

術院の中央本館と共同利用施設・厚生センター等が建設される計画になっている（第11図）。

地質調査所の施設として計画されている建物の延床面積は38,306平方メートルで このうち研究本館の延床面積は25,454平方メートル 別棟の延床面積は12,852平方メートルである。別棟として計画されているのは 標本館 海洋実験棟 実験地学センターなど10棟である。研究本館と別棟の配置関係は第11図のようになっており 標本館は 部外者の利用等も考慮して 内環状道路に近い位置に建設される計画になっている。

開昇撤玉歛四祝献降修開
 式神 串入 方 詞 神 式
 之之 奉之 奏 之 之
 辞儀饌奠儀祓上饌儀祓辞

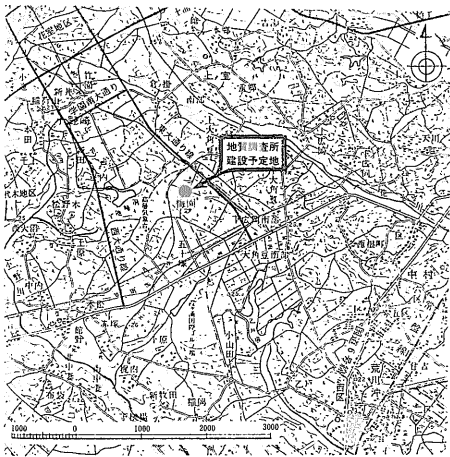
以上 起立 起立 起立
 第7図 式 次 第



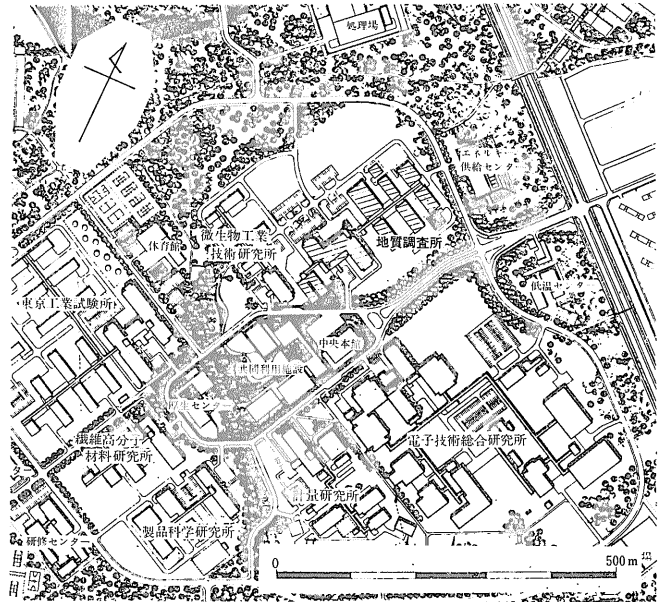
第8図 玉串を奉奠する松本敬信工業技術院長



第9図 玉串を奉奠する小林勇地質調査所長



第10図 地質調査所建設予定地付近の地形



第11図 B地区のレイアウト 斜線は地質調査所の建物を示す（工業技術院筑波研究センター基本設計概要5Pによる）

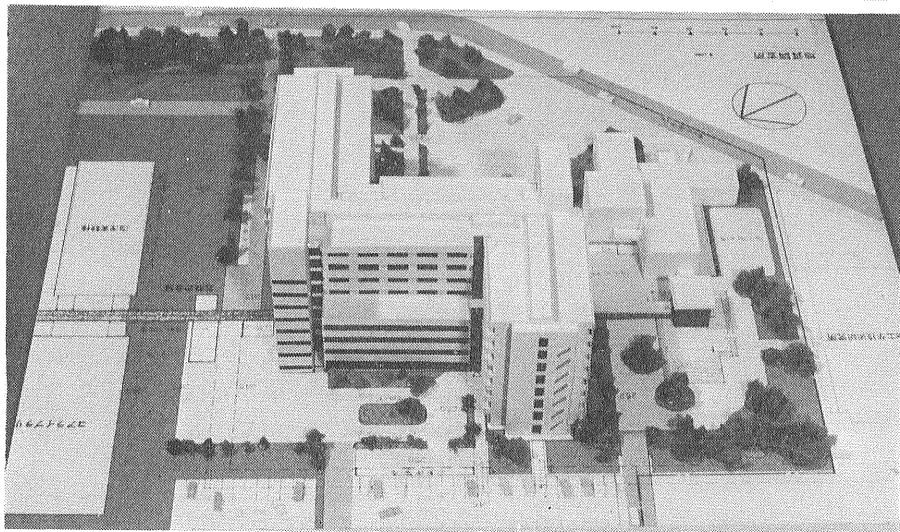
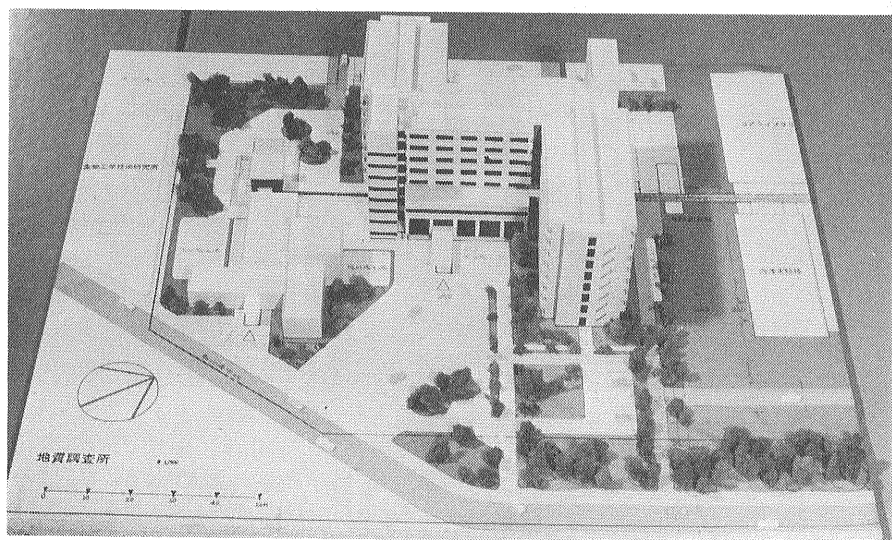
研究本館は 鉄骨鉄筋コンクリート造りで 地上8階 地下1階である(第12 13図)。 建物の主軸線は N75° W方向で この方向と直角の方向に 別棟が配置される。 建物の主軸線の方向は B地区全体に共通であり 日照 および風向などを詳細に検討した結果決定されたものである。

研究本館の構成・室配置は 研究動線・人と物の動線 および豊かな居住性を確保することを十分に検討した上で 3棟からなる逆Z字型にまとめられている。 内部の配置は 北棟と南棟の1階から8階までが研究室と実験室 中央棟の1階から4階までは事務室・資料室・電算機室などで 5階以上は研究室と実験室となっており 3棟逆Z字型の棟構成と中央棟の1階から3階の東側と

5階の西側までの奥行の深い室などは すべての室が一体となって機能的に連絡するよう配慮された結果として生じたものである。 なお 北棟と中央棟 中央棟と南棟のそれぞれの接点に当るコーナの部分には 一般空調と実験室の特殊空調用の機械室が配置され 特殊空調を必要とする実験室は 空調機械室に隣接する3室までの間に配置されている(第14図)。 このような機械室の配置は 機械室の集約化によって面積の有効活用を図るとともに 維持・管理を容易にし また 特殊空調室の空調効果を高めるためなどの検討結果にもとづいている。

室配置については 上記のような配慮がなされているが 防災を考えて化学系実験室を最上階に配置してある

第12図
正面からみた研究本館の模型写真 本館の左側の建物は標本館 右側の建物はコライブラリー 海洋実験棟 他の別棟は写真の右方に建設される この模型は躯体の基本設計が出来上がった段階のもので 周りのレイアウトおよび別棟の形などは 今後変更される可能性がある 中央棟東側は3階までは奥行の広い室になっており 1階から2階まではカーテンウォールとなる



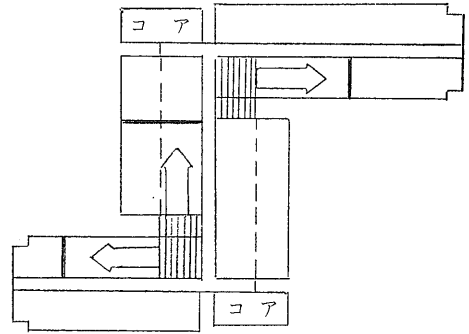
第13図
北西方向からみた研究本館の模型写真 中央棟の1階から5階までは奥行の広い室となっており 1階は管理部門 2階と3階は図書室を含む資料部門 4階はコンピューター室 5階は機器分析室となる

ほかには 1階から7階までは 将来の研究テーマの増加や変化に対応できるように 研究室・化学系実験室・物理系実験室などが混在型として配置されており 研究室は物理系標準実験室に 物理系標準実験室は化学系標準実験室にそれぞれ転換できるよう 室内の光熱水の供給・排出には様々の工夫がなされている。

地下室には機械室・電気室・監視盤室などが配置され一部には 化学分析用の試料処理室が配置されている。

以上のほかにも 建物の外観・玄関ホール・室配置などについては いくつかの工夫がなされている。 B地区全体を展望できる南東角の8階には建物の大きなアクセントにもなるバルコニーが二面にとりつけてあり 2階までがカーテンウォールとなっている正面の玄関ホールの壁面には 地質調査所の特徴を示す岩石モザイク張りが計画され また ドラフトや排気ダクトなどを必要とする実験室がすべて北棟と南棟に配置されていることなどは その例である。

昭和54年度概成・移転を目標に 研究本館の着工の日は遠くない。 明るく美しいタイル張りの外観ばかりでなく 機能的にも優れた居住性豊かな研究本館は わが国唯一の地球科学に関する総合的調査研究機関にふさわしい建物として やがて 緑濃い筑波の里に建つ。 そして 研究本館に隣接して建設される標本館は 規模においても地球科学に関するあらゆる陳列・展示を人間生活とのかかわりあいの上で行なうという独自性においても わが国唯一のものとなろうし 地球科学の専門家の研究の場として 地球科学の教育・普及の場として また 筑波研究センターと地域住民との接点として 価値ある存在となろう。



第14図 縦線部は空調機械室 太線は特殊空調室の配置限界を示す 矢印は空調方向を示す 破線は基準階(6~8階)の中央棟の外壁を示す

地質調査所は 戦後 諸般の事情によって 川崎市と東京に分割された状態にやむなくおかれ また 標本館や実験別棟などの建設ができないこともあって 実験研究に大きな支障を来していた。 しかし 筑波研究センターへの移転後は 地質調査所にふさわしい研究本館および別棟の建設によって 調査研究業務は 本来の目標に沿った幅と深味のあるものになろう。

筑波研究センターへの移転後 地質調査所における調査研究業務の中核となる研究本館の概要は 下記の通りである。

- 建築面積 3,582.7m²
- 延床面積 25,454.0m²
- 基準階の面積 2,667.9m²
- 建物の地上高さ 軒高32.16m 最高42.8m
- 室の規準面積と天井高 51.2m² (8.0m×6.4m) 2.72m
- 廊下の幅と天井高 2.16m 2.32m
- 構造 鉄骨鉄筋コンクリート造(一部鉄筋コンクリート造)
- 基盤 鉄筋コンクリート造(杭P・Cパイル)
- 地下工法 山留 切梁工法
- 空調 全館暖冷房
- エレベーター 人荷共用2t1台 人用(9人)3台
- 外装 打込みタイル



第15図 直会式場 右から 松本敬信工業技術院長 郡祐一参議院議員 渡部恒三通商産業省政務次官